

文学教育における感想文の取り扱ひの問題

——「城の崎にて」のばあいを中心に——

杉原康子

はじめに

文学作品の鑑賞や読解の指導をするとき、「感想文」をどのよう
に生かしたらよいか、ということは、かねがね興味のある問題であ
った。「城の崎にて」を扱りにあたって、二年生普通コース、269・
210・211の三クラスに、それぞれ違った立場からの感想文を要求し
て、ひとつの試みをしてみた。鑑賞、読解指導の中で、「感想文」
をどのように位置づけ取り扱えばいいか、そこからどのような問
題がおこってくるかを、わたくしの一つの実践例に即して考えてみ
ようと思う。

一 指導計画

どのような方法をとろうとも、鑑賞を深めるための基礎的読解と
なして、これだけは押さえておかねばならぬ重点書きとして、次の
ようなカードを用意した。

構想

○どうして城の崎へきたか。

〔電車にはねとばされた―後養生

(場所) 〓但馬の城の崎温泉。

(状態) 身体―頭はまだはつきりしない。

もの忘れがはげしい。

↑季節―稲の取り入れの始まるころ (秋)

○毎日、ひとりきり、散歩。

(心持ち、心境)

冷え冷えとした夕方 寂しい考え

寂しい秋の山峽 〔しかし〕

↑静かない気持ちがある。

いつか?

何かしら、死に対する親しみ。

(作者がけがをして死のショックを受け

た。死ぬということを意識した時に考え

なおされる生命―このモチーフが具体化

され、くり返されていく。)

テーマへ

(散歩)

1 はちの(死)

いかにも死んだものという「寂しかった感じ。」

「しかし」
いかに静かだった。静かさに親しみ

(散歩)を感じた。

2 ねずみの(死)

動騒の恐ろしさー寂しいやな気持ち(自分だったら)

術も) けがの場合を思い出す。

本質) ち(自分だったら)

雲は) 「あるがまま」しかたのないこと。

ムと) (木の葉) Ⅱ (散歩) ツナギの部分

リズム) とんがったところ (琴の弦)

の) 3 いもりの(死)

エ) まったく偶然ーかわいそう。生き

クリ) 物の寂しさ。

「生きていることと死んでしまっていることと、それは両極ではなかった。それほどに差はないような気がした。」

主題 三つの動物の死を通して考えなおされた生命(死による生命の認識)

表現

1 なにげなく書きだしている。

「自分は」Ⅱずとあとで。

「わがはいはねこである。」

日記・隨筆風。

2 明細な観察

細かな神経

(目に見えるような描写。対象的確なつかみかた。微妙な動きまで。)

3 そのものになりきっている。

身に迫るような表現

4 簡潔な表現

(まわり道をしないうで男らしくずばずばと書いている。「o」が多い。)

5 「寂しい」

「静かだ」 } クリカエシのリズム

「いかにも」

(注) () 中は感想文の中から吸いあげたもの)

このカードは、左肩の番号の順に使用し、三クラスともに、それぞれの読解の中で、ほとんどそのままの形で板書した。

二、指導経過

〔一〕『虫のいろいろ』と比較しての感想文(209のばあい)

4・25 「城の崎にて」と「虫のいろいろ

」(同教科書第二單元第二課)を比較して、似ていると思う点をあげ

よ。(予告前時間)

4・27 (感想文の分類)

A 作者の状態(動機)

病気のと。静(療)養中。19大野

28鬼頭

B とりあげられている素材。8石川

16牧野 40高岡

C 主題(テーマ)

(1)生きようとする本能、もがき。

39谷口

(2)生命を失うことの偶然さ。18太田

(3)生物のはかなさ 51西 63南

D 作者の創作態度、表現。

○動物になりきっている。

(ネズミ・クモの立場になって)

○細かい観察(目の鏡さ、敏感)。

11磯部 72吉田

5・2

E 自分の問題として発展させた人

22小木曾

1)

5・2 (A-E、これが具体的にどこに

表われているか注意して、考えながら読解)。

基礎カードによる読解19ページ。

2行めテーマの前にーまで。

5・6 第一 はちの死

第二 ねずみの死ー途中まで。

5・9 感想文 3 浅野29近賀

ねずみ終る。

24ページ「木の葉」47土井

5・10 まとめ第一 はち

第二 ねずみ↑↓のみ(比較)

第三 いもり↑↓はえ

2)

5・12 表現 ○32ページ(ねずみ)まで

47土井 44坪井 59濱井 21奥田

5・13 おしまい。総まとめ

生命の認識

死の生(結論)

「赤 蛙」

「風立ちぬ」 } の紹介

5・16 志賀直義について

— 作品を中心に —

3)

C 主 題

ことだと思います。」(40高岡)

(1) 「二つを読んでも感じたことは、「生命に対する動物の本能」ということであった。動物は生きることに対して、いかに執着をもっているか、『城の崎にて』のねずみの場合、はっきりと表われている。(本文引用。略)こんな場面は、「命をもっているものの共通の本能」ではないであろうか。それが『虫のいろいろ』では、半年もピンの中で、脱出の機会を持っていたくもを例にとつて書いてある。」(39谷口)

(2) 「(いもりの死と額のしわによってとらえたはえを引用。略)この二人の作者は、自分がいもりを死なそうとも、またはえをつかまえようとも思わなかったのに、それが偶然にもいもりを死なせ、はえをつかまえた。ここに私は共通点を感じた」(19太田)

この感想文に見られるように、偶然のできごとということとはとらえられているが、その偶然によって支配される生命、というところまでは発展していない。このクラスの特徴は、総じて、かなり苦心しているようだったが、実感に乏しく、皮相的な共通点しか把握していないために、低調なものが多かった。ただ両者の表現上の特徴を指摘したものは、かなり見うけられた。

5・2 表現

「『O』が多い。文章が一節一節小さくくぎれている。また両作者は、自分自身、ねずみであったり、のみであったりしたらどうであらうか、ということについて、細かにのべている。ここには、それらの動物たちによせる愛情の大きさと、観察の鋭さが感じられる。」(21塚田)

前時間に予告しておいて、二十五日に、次の單元にでてくる尾崎一雄の『虫のいろいろ』と比較して、共通点を見いだす作業をさせ、二十七日に、カードのように分類した。この分類にそつて、三、四の感想文の中から部分抜粋をしてみよう。

4・27 B とりあげられている素材

「二つの作品を読んで、同じ点は何かといえは、両者とも動物、しかも小さな虫、あわれな小動物の行動を書いているという

(二) 『城の崎にて』『風立ちぬ』『赤蛙』三つを比較しての感想文(210のばあい)

(使用した補助プリントは、今、紙面の都合で省くことにする。
『風立ちぬ』は、例の、風立ちぬ、いざ生きまやも、のことがでてくる箇所と、主人公が、病気の節子のそばで、二人で生きた瞬間を、感動をもって思い出している箇所を抜粋。『赤蛙』は、石の窪みに向かって最後の試みをして、力尽きて死んでいった赤蛙の姿に、作者が、深い感動を覚えて、作品の末尾の部分抜粋。)

4・25 補助プリント 襷布(時間後)

どれにも共通していること(もの)は何か。

4・26 (感想文を書かせる予定であったが、よほど抵抗を感じるようだったので、一時間余裕をだす。)

○プリント 私が朗読。

○どうしても、共通点のつかめない人、は『城の崎にて』だけを読んで、三つの動物の死のうちでもっとも印象に残ったものについて感想を書く。

1) (『虫のいろいろ』をはずしたいきまふあり。)

4・27 がやがや話しながらそれでもなんとか書きあげた。

5・2 「城の崎にて」の読解

「風立ちぬ」との比較において「赤蛙」

感想文を中心に。

(多かったものの順に感想文を分類)

○「死」について書かれたもの。

○病気という作者の状態について。

○作品に即して。(本能のものがき、偶然)

○拙き方、感じ方について。

○生命の認識について。

○自分の問題として発展させたもの。

(特異なもの)

以下、説明を本文に結びつけていく。

2)

5・2 はじめに
感想文を読んで。

○真剣さに打たれた―ひとりひとりの心の表われ。よかった。

○今日十三人の発表

名前を発表―心のつながり。できる
たさんの人のを読みたい。でてこな
かった人は私はどの項目にはいるか考
えてみてほしい。

○『死』について

1 「死」にいたるまでの命をたいせつに。
(三つの比較ができなくて「城の崎に
て」だけをとりあげたものが多い。)

19 大橋 12 鴉飼 34 小林 57 福井

2 「死」そのものについて
23 加藤恵 1 浅野 11 上野 24 加藤己
ほか二名

3 限界を生きる

25 各務 58 松尾 53 早坂

5・6 (読解へからませてゆく。)

(1) 病気という状態 (作者の創作動機)

29 川合 61 牧野原

○死に対する親しみ (作者の心境)

5・6

(2) 作品に即して

構想 ○ 静かさ (はちの死)

38 坂本 13 内山

○ 本能のものがき (ねずみの死)

5・2との関連

死との戦い。

暗さ、苦しみ

↑ ↓ 「赤蛙」

「のみ」

5・10 56 菱田 35 近藤 65 森島

「木の葉」

5・12

○ 偶然 (いもりの死) 60 牧野 3 伊藤達

4)

5・13 まとめ 32篠原 4伊藤富恭

54服部 ←

主題

死 ←

(生)

はち―動いている。(まったく動かな。
生きている。い。静かだった。)

ねずみ―生きようとする努力。

(生への執着、苦しみ)

いもり―偶然に支配される。

生命(あわれさ。寂しさ。)

「生きていること」

「生命の認識」(↓節子と私
赤蛙の姿)

5)

5・13

表現

(ねずみの途中まで)

○こまかい観察 21加藤順 17奥沢

56中村

○そのものになりきる 31京念

○的確な把握 55樋口

○多いことば(クリカエシてあるこ
とば) 68山内 33榎瀬 16岡戸

5・16 おしまいまで。

総まとめ。特に三つの作品を。

(反省と読書への案内)

自分の問題として発展させたもの

(簡単に) 2安藤 48内藤67森

本

6)

授業に使った感想文の中から少し抜粋してみよう。

5・2 『死について』

2 「生あるものの悲しみ、それは「死」であろう。生あるもの
れしもが生を求めてやまないが、「死」というものは、生あるも
のに決定的にやってくる。私は「死」がいつかはくると思いなが
らも、それが近いところにあるものではなく、なにか遠いところ
に存在するものだろうと考えていたが、これらを読んでみて、生
あるものが、いかにはかないものなのかが痛感された。それぞれ
の人が、「死の壁」にいつあたるかもしれない。明日かも今日か
もしれない。その「死までの壁」が厚い人も薄い人もあるであら
う。『城の崎にて』に出てくる「ねずみ」は壁が厚く、「いも
り」は薄いと、私は思う。その壁の厚いものほど苦しみも大き

く、それからのがれようと力の限り戦い、自ら傷つきながらも、「生」を求めてやまないだろう。でも結局最後は死んでいくのである。私は「いもり」の死がうらやましい気がする。私はこのように苦しめないで死ねたらいいとも思う。」(23加藤恵)

3 「——生きる——この三人がそれぞれなにもかのかの死を見て、自分自分の、生きていく、という自覚を深め、そして自分も一つの生きものであるために、やがて死というものを受けねばならないと、死へのおそれ、また静かさを感じているように思う。(中略)自殺を知らぬ動物、そしてその動物は、自分の生きていく限界を知らず、苦しんでせいっぱい生きようともがいている。(中略)私はときどき自殺を考えることがあるが、この三つの作品を讀んで、みんな生きること、その限界の中で、せいっぱい生きることを考えているのだと思ひ、なにかはずかしくなってきた。(中略)死の恐れ、寂しさにうちかかって、自分の限界をせいっぱいに生きてゆこうと思う。」(53早坂)

5・6 (1)病氣という作者の状態

「三つの作品のどれを讀んでも、なんとなく人に迫ってくるようなところがある。それぞれが、「死」というものに近づいたからこそ、あれだけのものが書かれたのだと思う。病氣は一種の哲学者みたいだ。——いわば、病氣があれだけの小説を書かせたのだと思う。」(61牧野原)

5・13 (まとめ)

「三つの作品とも、作者が病床にあるというか健康でない時に書いたものであるらしく、死を見つめることにより生きるという気持ちを通してもっていると感じた。『風立ちぬ』の中で、自然がほんとうに美しいと思えるのは、死んでいこうとする者の眼だけだ。と書かれていたが、これは後の二つの作品でも言っているし、私もこの意見に同感する。(中略)このようなことを考えていると、自殺者とか、人間に飼われている犬、猫などの動物に比べ、もっとも役に立たず、かえって害になるような動物の死を通して、そのたくましい生命力を、私たち人間は、もっと見習うべきだと思ふ。死を見つめることにより、生きるという意味を考へることは大切なことだ、私は三つの作品を讀んで、そう感じとった。」(54服部)

喪失の意識に支えられた実在の感動を、かなりはっきりと、とらえているように思う。同じような傾向の作品を与えることは、テーマの把握には役立つように思う。

5・13 表現

「とくに『赤蛙』と『城の崎にて』の書き方は、すべてにおいて似ていると感じた。ひとつひとつの生物の運命に対する同情の気持ちだが、印象深い書き方の中にじみでている。死を感じた作者たちが、その静かな寂しい心で、自然あるいは動物を、実に微妙な動きまでとらえている。『城の崎にて』においては、々にくいほど々々ということばを用いたくらい、よく観察している。また、「寂しい」「静かだ」ということばがくり返され、しかも、その使いわけが志賀直哉独特で、その場その場の情景を十二分に

感じさせてくれた。」(16 岡戸)

(三) 『城の崎にて』だけの感想文(211のばあい)

4・25 (予告)

「城の崎にて」を読んで感じたこと考
えたことを書く。

4・26 感想文を書く。(下書きのある
ものチラホラ。うれしい。)

4・27 「城の崎にて」の読解

—感想文を中心に—

(感想文の分類)

主眼(テーマ)

結論は出さず

読解の過程を通

提示にとどめよ。 — して。

1 小動物の生死(モチーフの具体化)

22 坂口 ほか三名

2 生きているものの生死と運命

65 吉田 ほか二名

3 生き物の寂しさ生きようとする努力の

苦しみ 2 市野 ほか二名

1)

4 偶然の不思議さ 5 井原 45 藤岡

5 死への不安恐ろしさ 61 山田

6 死に対する親しみ

生きていることと死んでいることは

差がない。 50 三浦 58 森

7 死による生命の認識

18 小林 1 浅井 64 山中

5・2

○作者の状態(死をまぬがれたあと)
構想(読解へはいる)

はちの死の終わりまで

5・4

ねずみの死 沖村 8 岡本 71 渡辺

2)

5・6 ねずみのところをまとめて

「つなぎ」の把握

(いもりのところ読む。)

5・9 偶然—差はない。12 川津

構想のまとめ↓テーマへ(4・27と関
連)

5・10 表現二二ページ 13 桐山

5・11 表現おわり(まとめ)

簡潔、C多し 90 矢島 36 成瀬

そのものになりきる。38 長谷川

くり返し。66 吉村

観察感覚が細い。41 服部 43 広瀬

5・13 総まとめ

○この作品の主題はただ死ということ

であらうか。64 山中(再使用)

○自分の問題として考えた人々。

32 徳田 11 川口 54 三宅

○「赤蛙」「風立ちぬ」紹介

○志賀直哉について。

3)

このクラスは、比較的スッキリいった。ただ、全体に短かく、ス
ラッと流れすぎて、つっこみがたらないように思った。

4・27 4 偶然の不思議さ

「(いもりの死引用)そこで作者は、いもりの気持ちになつて生きも
の寂しさを感じる。私はこのところを読んで、自分の胸が押し
つけられるような感じがした。(中略)私は、これを読んで、い
ままで思っていた偶然というものより以上、偶然というものの不
思議さがわかってきたような気持ちになった。」(5 井原)

4・27 7 死による生命の認識

「電車事故でけがをし、その後養生のため城の崎温泉へ行き、そ

こで三週間暮らす。その間、彼は孤独で、いつも寂しくもの思い
にふけた。一つまちがえば自分も死んでいたかもしれないそ
ういう体験をかえりみながら、はちや、ねずみや、いもりの動物
の死をみつめ、人間の死と関連づけて、生物の死の問題を考え
る。(中略)こうして彼は、これら三つの動物の死を通じて、自
己の生を認識しなおしていると思った。」(64 山中)

5・5 ねずみの死

「私たちは死ということをとかく遠いことのように考えがちであ
る。実際に、作者のような危険にさらされた場合、初めて、死に
対する寂しさ、恐ろしさを感じ、生きるということに非常な努力
をする。これは生きているものすべてであると私は思う。この
城の崎にてを読んで、死ぬことの簡単さ、ねずみのように助かり
そうもない生命を、それでも、いっしょうけんめい生きようとし
る姿は、なぜかあわれでならなかった。ネずみが殺されまい
と、死ぬにきまった運命をにないながら、全力を尽くして逃げ回
っている様子々々という書き方が、私の心を打った。」(71 渡辺
時)

5・11 表現

このクラスは、表現についての感想に、適切なものがかなりあつ
た。

「この作品を読み、志賀直哉という人格を、私はなぜか強く受
けた。一つ一つ、文にそれがあらわれている。まわり道をして書
かず、ずばずばと、はっきり男らしく書いている。私はこの書き
方に、非常な魅力を感じた。」(60 矢島)

「読んでみて、作者が、「もし自分がこの動物だとしたらー」
というように、この中で書かれていくものになりきって、死
期が迫つても、あくまで生きのびようとする努力や死の苦しさを、
また偶然に支配される命のあわれさ、不安などを、ほんとうに、

そのものの気持になって書いているところに心を動かされた。」

(38 長谷川)

「感心したことは、動物の細かな動きをよく観察して書いてい
ることだ。私は、偶然にも、いもりを殺してしまつた。ところ
ろを読んでいるうちに、何だか悲しくなつてしまつた。もし、こ
の表現がおおざっぱに書いてあつたら、人の心をひきつけられな
い文になつていたかもしれない。」 (43 広瀬)

三 取り扱つて気づいたこと

(一) のばあい

- (1) はじめの感想文のまとめは、比較的定着したが、それを読解の
中にくみ入れていくのに、かなりの抵抗があつた。
 - (2) 本質的な共通点を見いだしてないために、感想文を導入する
ことがあまり役に立たず、深めたい鑑賞の方向と感想文の内容と
が、チグハグで弱つた。
 - (3) のちに、『虫のいろいろ』を扱つたが、この作品は、あまり適
した教材ではないと思つた。大人の尊厳といったものは、若さに
はピンとこないのではなからうか。
 - (4) 比較するものが、適当でなかつたため、わざわざ感想文を低調
にしてしまい、あとの進行が苦しかった。
- (二) のばあい
- (1) まず第一の特色は、「死について」の考えが、多くのべられて
いることである。しかも、自分の問題として、かなり発展させて
考えている。三つの共通点は何か、という問いで、「死(と生)」
というテーマは、かなりはっきりととらえられていた。
 - (2) しかし、そのテーマが、先走りしてしまつて、(常に三つの比
較に気をくばっていたため)『城の崎にて』そのものの鑑賞が浅

くなり、洗まないで困つた。

(3) ただ感想文には、他の場合と比べて、かなり本気があらわれ
ているように思えた。

(4) その後、『風立ちぬ』、『赤蛙』を読んで生徒を見かけ
た。このキッカケで読むようになったとすれば、読書指導に役立
つたわけだ。

(三) のばあい

- (1) このクラスは一番スッキリいつた。まずひとつの作品をしっか
り読み深める。
- (2) 感想文は分類しやすく、鑑賞を深めるのに、自然にくみ入れて
いくことができた。
- (3) 感想文(生徒の発言)による鑑賞指導は文学作品の場合の、ひ
とつの常道と考えていいのではないか。
- (4) 『赤蛙』『風立ちぬ』などの紹介は、形だけのものになつたよ
うな気がした。読書案内としては、たとえ一部分であっても、本
文そのものを与えるのが効果的であらう。

四 反省と今後の問題

- (1) 『虫のいろいろ』との比較は、あまり好ましくなかつた。比較
するものに、もっと慎重な吟味が必要であつた。
- (2) 常道としては、『城の崎にて』だけの感想文による鑑賞指導
が、一番よいと思う。(逆にいえば、(一)の場合は、もっと多角
的な感想文を期待していたが、でてこなかつた。感想文を書く立
場の設定に、もっと工夫が必要であつた。)
- (3) しかし、感想文に表われた書く態度の本気さは、(二)のばあいに
強く見られた。その原因は、補助プリントが興味を喚起したこと
と、共通点を見つけよ、という書く立場の設定、この二つによる

ものと思われる。説書指導にも役立つようだ。

(4) とすれば、(二)の場合は、もっと工夫して生かしたいと思う。全員に、共通点を見つけたという立場を義務づけないで、それに抗指を示す学習者には、本文だけの感想文を書かせる。この時も、手放しの感想文ではなくて、たとえば、始めに項目をあげて(今回ほでてきた感想文を項目に分けたのであるが)、その項目のいづれかについて書かせる、というように、書く立場をはっきり設定する。

(5) 個人差を生かした方法が工夫され、立体的な教室になれば楽しい。

○ひとりひとりが、それなりに本気になって参加できる授業になればうれしい。

○いい感想文がでれば、おのずから鑑賞は深まる。いい発言によって、授業は帰納的に充実する。

○あくまでも、学習者の実感に支えられた教室でありたい。

おわりに

以上、ささやかな実践を通して、感想文を鑑賞指導の中にどう位置づけるかの問題は、どんな感想文がでてるか、ということと呼応することがわかった。この問題は、さかのぼって、感想文を書くのに、どれだけ本気にさせることができたか、ということに、ひとつの主眼点がある。義務づけられないで、伸び伸びした中にも、はっきりと書く立場の設定によって、ひとりひとりが、それなりに、本気になって書いた感想文に支えられた時、鑑賞は自然な深まりをもつてあろう。

ともかく、まずひとつの作品を読み深めること。比較は次の段階。しかし、このひとつのものを読み深める時、不完全ではあっても、意識の似通ったものと比較してつかんでみることも、鑑賞には必要である。おもしろいのではないだろうか。(三)の場合が普通

だ、という常識に甘んじないで、いつも新鮮な実践主体であるためにも、小さいながらも、たえず新しい試みをつくふうしていきたいと願ったのである。

昭和35年8月初稿 昭和35年8月29日清稿

付記 本稿は、昭和35年8月5日、第一回広島大学教育学部国

語教育学会において発表した内容を、まとめたものである。
(名古屋短大付属高校教諭)